



デュアルオペアンプ搭載でハイパワー

ハイエンドイヤホンも 鳴らし切るポタアン

アジア屈指の開発力を誇り、独自技術を搭載したイヤホンをリリースしてきたブランド「DUNU (ドゥーヌ)」。
次なる挑戦は、ポータブルDACアンプ。最大で4Vrmsの駆動力を誇り、
さまざまなイヤホンを鳴らし切る「DTC 500」の魅力をご紹介します。

文／野村ケンジ *Kenji Nomura*

バランスや聴き心地のよさに一驚

DUNUといえば、ピュアベリリウム振動板を搭載した「LUNA」などのシングル・ダイナミック型ドライバー採用イヤホンに注目が集まっている中国ブランド。そんなDUNUから、さまざまなイヤホンがスマホであっても最適な音で楽しめる、ドンクルタイプのDACアンプ「DTC 500」が登場した。iPhoneなどiOSデバイスに接続できるLightningケーブル付属モデルと、Androidスマホなどと接続できるUSB Type-Cケーブルが付属したモデルの2つが用意されている。

まず、音質の要となるDACチップは、ESS社製の「ES9038Q2M」を搭載。768kHz/32bitまでのリニアPCM、22.6MHz(DSD512)までのDSD音源がデコード可能となっている。現在リリースされているハイレゾ音源はほぼすべてに対応しているハイスpekさだ。さらに、100MHzまでの高周波出力に対応した、低ジッターのアクティブ水晶発振器を搭載。アシンクロナス(非同期)モードに対応することで、USB経由のジッターを低減させている。さらに、ヘッドホン出力に関しては4.4mmバランスと3.5mmステレオ、2つの端子を搭載しつつ、2つの独立したオペアンプ「RT6863」を採用することで、200mW(32

Ω/バランス出力)という高出力と低歪みを両立することができた、とメーカーはアピールしている。

一方で、個性的なデザインを採用しているのも特長だ。筐体にはCNC削り出しのアルミを使用し、一部にクリアパーツを組み合わせることで内部やLEDの光が見えるようになっている。スマホ端子側に窓ガラスのようなクリアパーツが、ヘッドホン端子側にフィンのような意匠が形づくられているため、まるでイタリア製スーパーカーのミニチュアのようにも見える。遊び心が満載で所有欲をくすぐられる。

実際のサウンドはどうだろうか。2台のスマホ(iPhone SE2 2020)とXiaomi「Mi 11 Lite 5G」に接続し、ハイレゾやストリーミングサービスなど、さまざまなスペkの音源を試聴してみた。ちなみに、イヤホンはDUNU「TITAN S」を使用、こちらに同社製アップグレードケーブル「DUW-02」(4.4mm/バランス端子を利用)を組み合わせた。

一聴して驚いたのが、音のバランスのよさ、聴き心地のよさだ。TITAN SはiPod Touchや、Astell&KernのDAP「SP2000T」などと組み合わせると、高域のざらつき感が僅かに感じられるが、DTC 500と組み合わせると、中高域がクリアに、随分と聴き心地のよいウェルバランスなサウンドへと変化してくれるのだ。なかでもボーカルは距

ポータブルDACアンプ

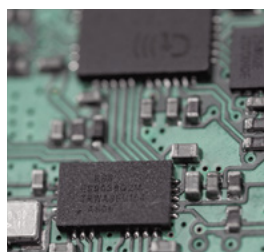
DUNU DTC 500

¥OPEN ▶投票 No.070

SPEC ●DAC: ESS Technology「ES9038Q2M」×1 ●最大対応サンプリング周波数/量子化ビット数: PCM→768kHz/32bit, DSD→22.6MHz ●ヘッドホン出力: 3.5mm、4.4mm ●出力レベル: 2Vrms@600Ω(アンバランス)、4Vrms@600Ω(バランス)、100mW@32Ω(アンバランス)、200mW@32Ω(バランス) ●外形寸法: 55W×13.7H×18.5Dmm ●質量: 約17g ●付属品: USB Type-C to A変換アダプター

POINT

高性能DAC「ES9038Q2M」を搭載



ESS Technology社のモバイル用フラグシップDACチップ「ES9038Q2M」を採用。ESS社が開発した32bit Hyperstream IIが採用されており、優れたS/Nを実現している。なお、DTC 500のS/N比は122dB。USB入力時には最大PCM 768kHz/32bit、DSD 22.6MHzに対応する。

ハイパワーでヘッドホンも鳴らす



DACで変換されたアナログ信号は2つの独立したオペアンプ「RT6863」による増幅によって、最大4Vrms(バランス/600Ω)、200mW(バランス/32Ω)の出力を実現。ハインピーダンスのヘッドホンも余裕を持って鳴らすことができる。

離が一段と近づき、情感あふれる歌声を楽しませてくれる。男性も女性もほんの少しハスキーで、大人っぽくも感じられる。

さらに、他社製ハイグレードイヤホンと組み合わせても良好な印象を得られた。JVC「HA-FD01」は肉感あるボーカルが楽しめるダイレクト感の高いサウンドを聴けたり、final「A8000」は、ディテールのしっかり伝わるクリアな音を聴かせてくれた。オーディオテクニカのヘッドホン「ATH-ADX5000」も試してみたが、ボーカルがややハスキーで、音源本来のエコー成分が普段より強く感じられて、ピアノのタッチも強めだ。十分に鳴らしてくれているが、DUNU製品をはじめとするイヤホンとの相性の方がより好ましいように感じた。

また、ストリーミングサービスとの相性もいい。今回はAmazon Music HDでSD(標準音質)音源をメインに試聴してみたため、ハイレゾ音源に比べて解像度が劣っていたものの、パワフルで抑揚のしっかりした、ノリのよいサウンドを楽しむことができた。

このようにDTC 500は、手持ちの有線イヤホンをスマホで手軽にいい音を楽しみたい人にとって、有力な選択肢だ。1万円前後という価格を考えると、かなりコスパのよい製品でもある。特にDUNUイヤホンを持っている人にとっては、最優先の選択肢といえる。



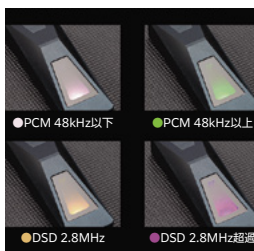
USB Type-C to Cケーブルが付属するバージョンと、Type-C to Lightningケーブルが付属するバージョンの2タイプが発売される予定だ。

内蔵クロックでジッターを低減



100MHzまでの高周波出力に対応した水晶発振器を搭載。入力信号のタイミングをコントロールするクロックを、内蔵クロックによって制御する非同同期モードに対応。USB伝送ジッターおよびSRCの影響を受けずに、よりピュアな信号伝送を行うという。

サンプリングレートに応じて色が変化



RGBインジケータライトを備え、再生中の楽曲のサンプリングレート/フォーマットに合わせて色が変化する。なお、Android端末等のUSB Type-C同士での接続の場合、PCM 48kHz未満で薄いピンクに、PCM 48kHz以上で緑に、DSD 2.8MHzでオレンジに、DSD 2.8MHz超過でピンクに変わる。※ただし、iPhoneでLightning to USB Type-Cで接続した場合、上記通りに色がかわらない可能性もある。

DUNU

アジア屈指の開発力を誇るブランド

DUNUは1994年に創業されたOEMメーカー「TOPSOUND」を母体とし、2006年にスタートを切ったイヤホンブランド。2012年に日本上陸当初は、コストパフォーマンスの高いイヤホンで注目を浴びていたが、現在はハイエンドモデルの開発に力を注いでいる。ピュアベリリウム振動板を搭載した「LUNA」、自社開発の「ECLIPSE」ドライバーモジュールを搭載した「ZEN PRO」などをリリースし、アジア屈指の開発力に磨きをかけている。